

乙羽信子

どろんこ半生記



どろんご半生記

乙羽信子

聞き書き 江森陽弘

朝日新聞社

どろんこ半生記

定価 一三〇〇円

乙羽信子／江森陽弘

発行日／昭和五十六年五月二十日第一刷

発行者／初山有恒

印刷所／図書印刷

発行所／朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五丁目二番地
編集・図書編集室 販売・出版販売部
電話 〇三・五四五・〇一三（代）
振替東京〇一七三〇

目 次

出生の秘密

母の意思

芸に由縁の実父

路地裏の美少女

陰のある血

桜の花咲く頃

日陰の花

スターへの道

芸名の由来

妬心のるつぼ

空襲警報

宝塚海軍

復活の日

天津乙女

デベンの世界

ダンスパーティ―

真新しい家

スト指令

166 157 148 139 129 119 110 101 92 82 73 64 55 46 37 28 19 7

コーちゃん
 サヨナラ宝塚
 女の決断
 百万ドルの……
 愛妻物語
 原爆の子
 近代映協へ
 朱い糸
 不倫の恋
 忍ぶ愛
 苦難の日々
 女の執念
 共演者たち
 沈黙の世界
 続・愛妻物語
 あとがき
 聞き書きを終えて

乙羽信子
 江森陽弘

310 309 300 291 282 273 264 255 246 238 230 221 212 203 194 184 175

裝
幀
多
田
進

どろんこ半生記

出生の秘密

私の夫、つまり新藤兼人のことを、つい「先生」といつてしまふ。

「先生」も私のことを「乙羽君」という。二十七年間、ずっと、こう呼び合ってきた。

結婚したとき、「別居結婚」などとマスコミに書かれた。いまでも先生は返子、私は東京・赤坂のマンションで、別々に暮らしている。庭つきの一軒家は、なにかと面倒くさいのでマンション生活の方が気楽である。

そのマンションに、ある夜、電話がかかった。仕事の連絡かと思って出ると、太い女性の声で「親戚の者だ」という。鳥取なまりの声は、少し震えていた。のっけから、

「あのなあノブちゃん。なにもいまさら昔のことを書いたり、しゃべったりせんでもええのになあ。親戚のモンも迷惑しとるにイ」

私は、その声を制するかのようにいった。

「ご心配、ありがとう。でも、私が、私の母や自分のことを書いて、どうしていけないんですか」
電話はすぐ切れた。

私は五十五歳。新藤兼人との「永すぎた春」にもビリオドを打った。私の人生の、ひとつの区切

りでもある。そこで、たいしたことはないが、小さな「自分史」を正直にまとめてみたい、と思つたにすぎないのに「親戚」と名乗る人は、それを極度に嫌っている。

わからないわけではない。私だって、地方の小さな町で平凡な生活を送っていて、世間話と祭りが最高の楽しみだとしたら。そして突然、触れられたくもない過去を誰かがほじくり出し、大声で叫ぼうとしたら、その人の口を塞ごうとするかもしれない。

でも、許してほしい。

私は「自分史」を語ろうと、すでに決めてしまったのだから。

私は強情な女といわれてきた。かつて大映の女優だったころ、「百万ドルのエクボ」などといわれた。しかし、もっと本格的な女優になりたいと思つた私は、考えたすえ、汚れ役の多い独立プロに飛び込んだ。もちろん、反対の声はあつたが、一度きめると止まらない。私の性格である。

他人からみたらいやな性分の女とうつるかもしれないが、たぐっていく自分の「過去の糸」の先に、どんなシミがついていようと、それが私自身の本当の姿だとしたら、仕方がない。

私の旧姓は加治信子だが、小学生のころは、坂東信子といった。母方の祖母・坂東ユウが坂東家が絶えるといつて長女である母・澄栄と私が加治家にはいることを反対したためだ。だから宝塚歌劇団にはいるまで、友達から「バンサン」と呼ばれていた。

そんなある日、祖母と母が、いさかきをしているのを隣室で聞いた。

祖母が、

「お前は子どもを産んだことないさかい、わからへんねん」

と、強い口調でいった。母はどんな顔をしていたかわからないが、押し黙つたままであつた。

おや、やっぱりおかあちゃんは私を生んだのと違うのかなあ、と思つた程度で別段ショックでは

なかった。幼いころから近所のおかみさんたちに、

「あんたの母親はなあ、ほんまのオカアちゃんとかうでえ」

と、聞かされていたし、顔もあまり似ていないので、「やっぱりそうだったのか」と思ったものである。

それが決定的になったのは宝塚にはいつてからである。父親・千太郎は私をたいへん可愛がった。何処にでも連れて行ってくれたし、欲しいものはなんでも買ってくれた。

いつだったか、

「おかあちゃん、おとうちゃんがこれこうてくれたんや」

そういいながら品物を見せると、母親はつくり笑いをして目をそらした。何かをしきりにこらえている。そして、こんどはジッと私を見た。それは射るようなシットの視線だった。少なくとも母親の目ではなかった。

ルーツの糸が目の前に

宝塚から映画にはいったころ、私は偶然にも戸籍謄本をみた。母親はわかっていたが、父親も血のつながらぬ赤の他人であることを知る。私は「養女」だったのである。

しかし、だからといって、本当の両親に会いたいとも、私のルーツをさぐりたいとも思わなかった。

世間には養女なんてザラにいる。それに、いまさら生みの親を知り、対面したとしても、どうしようもない。どうせ、私を手放した親である。私にとっては、やはり加治千太郎は父親で、澄栄が

母親ということに変わらない。

そういえば、幼いころから私は人見知りする子だった。体も弱かった。だから外で子どもらしく遊びまわったり、暴れたりした記憶がない。家の中でおてだまやオハジキをしていた。無口で、どちらかというと、陰気な少女であった。

神様のいたずらだろうか、そんな私の目の前にある日、「ルーツの糸」が一本、ぶらさがった。もともと、ルーツなんぞには関心ありませんみたいな顔をしていても、自分のルーツにぜんぜん興味をもたぬ者はいない。

私は、そっとナゾめいた糸をひっぱってみた――。

その糸は東京と米子を結んでいた。

東京オリンピックが開かれた三十九年の夏、私は千葉県印旛沼で「鬼婆」(新藤兼人監督、近代映協・東京映画共同作品)の撮影にはいていた。八月の盛夏で、背丈よりも高いヤブの中は蒸し風呂のようだった。水も電気もないところに小屋を建て、スタッフは泥と汗にまみれていた。

何日かして監督から「休日」が与えられた。私の元マネジャーが車で迎えに来た。そのころ、私は国電・品川駅近くの木村屋アパートに住んでいた。

アパートへ帰る途中、

「驚きなさんなよ」

とマネジャーはいった。

「なによ、なんなのよ」

「あなたをたずねて来た女の人が、三日前からアパートで待ってるんですよ」

「え？ 何処から？」



2歳。助産家から加治家に
養女に出されたころ

「米子。鳥取の。あなたのイトコらしい……」
「私にイトコなんかいるわけじゃないの」
「本当なの？」

と繰り返して聞いた私は、突然、口をつぐんだ。その人は戸籍謄本を何枚も持って来たというのだ。しかも、その人がなんとなく私に似ているとマネジャーもいう。

体がシンから熱くなっていく。好奇心が動いてきた。

アパートのドアを開けた。階段のそばに地味な着物の、中年の女が立っている。私を見ると、一歩うしろにさがった。私よりひとまわり大きく、がっちりしている。

その人の顔を見た。彼女はナミダを浮かべている。

一瞬、立ちすくむほど、私に似ていた。とくに、ヒタイの生えぎわがそっくりである。鏡を見ているようだった。このとき私は三十八歳。この年になって初めて「身内」と名のつく人と出会ったわけである。

彼女はキヨ子さんといい、私のイトコだと名乗った。胴巻きの中から何枚かの戸籍謄本を出し、誰が、どこの誰と血縁であるかについて話し出した。まだ泣いている。

「誰」がどこの人とういう関係でもいい。

正直いって関心がなかった。この人と対面したときに覚えた「血のたぎり」は、すでに消えていた。

女優というのは、なんて冷酷な職業なのだろう。「初めての身内」と会って、まだ三十分とたっていないのに、

「身内との対面という芝居をよくやるが、そのとき、わっと抱き合って、ただただ涙というのは、ちよっと違うなあ」

などと、芝居の演技について考えていたのである。

父親はいなせな二枚目

それとは知らない彼女は話し続ける。

「それにしても貴女のオデコと首筋はお母さんにそっくりやねえ、生写しているんですか、こういうのは」

私の実母の名は「山登^{やまと}たけこ」と教えてくれた。

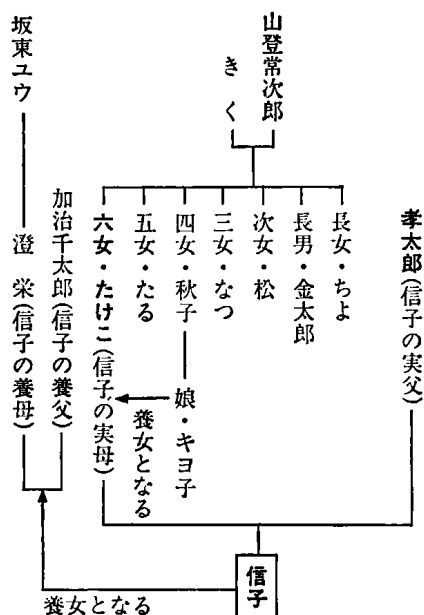
「山登たけこ」——初めて聞く名前だから馴^なじみのあろうはずがない。

戸籍によると、

米子市西倉吉町八番地 明治参拾参年拾貳月貳拾壹日出生 山登常次郎・きくの六女とある。

彼女の話だと、山登家は代々武士の家柄で、山登常次郎の先代・山登源平のころは羽振りもよかったが、常次郎のころから傾き出したそうである。

「たけこ」は末っ子で、兄一人と五人の姉がいた。しかし、たった一人の男の子「金太郎」は明治二十一年、ヒナ祭りの三月三日に産声をあげたが、四日後に死亡している。あとは女の子ばかり。長女の「ちよ」をはじめ次女「松」、三女「なつ」、四女「秋子」、五女「たる」と無事に一人前の娘に育った。六女の「たけこ」は小柄だったが、近所でも評判の器量よしだった。家が貧しいため、娘たちは働きに出た。しかし、すらりとして美しい「たけこ」だけは大阪の花柳界に出て芸者になり、病身の父親にせつせと送金していたらしい。「義母^{かき}さんは目鼻立ちがようて、働きもんで、親孝行でした」と、キヨ子さんはいった。



「たけこ」には間もなく、愛人が出来た。というより、通いつめる数多くの旦那衆の中から、大阪市此花区今開町の大きな魚問屋の息子を選んだといった方がいいかもしれない。キリッとした、いなせな男だった。「助^{すけ}孝太郎」といった。「たけこ」と「孝太郎」が連れ立って歩くと、通りすがりの人は振り返る。雨の日など、二人の相合傘はオツな絵だった。やがて「たけこ」は身ごもる。「孝太郎」と、どう話し合ったかわからないが、「たけこ」はお腹の子を生む決心をする。

そして数カ月後、お腹が目立たないうちに働くだけ働いて「たけこ」は米子に帰って来た。彼女は間借りでもしていたのか、米子市内の肉屋の二階で出産した。

安産だったと聞いているが、生まれてきた赤ん坊はヤせて小さな女児であった。戸籍には、山登たけこの私生児「山登信子」とある。これが私、つまり女優・乙羽信子の生まれた姿である。

生まれるとすぐ「孝太郎」がひき取りに来て認知したらしく、「助臺信子」となり、やがて養女に出されて「坂東信子」、そして「加治信子」と変わっていくのである。

子を奪われた「たけこ」は米子の町で暮らすことになる。

さぞかし、つらかったことだろう。当時の米子には、こうした境遇の女たちが多かったと聞くが、母・たけこは縁あって小さな工場を経営する「某氏」と結婚する。

その「某氏」も仕事の関係で長期間帰らないことが多く、その間、「たけこ」は家政婦などをして生計をたてていたそうである。

ついに「某氏」は胃ガンで亡くなってしまった。ひとりぼっちになった「たけこ」は、一人暮らしはさびしいというので姉の「秋子」の娘を養女にした。その人が私のアパートを訪れたキヨ子さんである。

「たけこ」が死亡したのは昭和三十六年の秋である。キヨ子さんのために小さな山を残してくれたのだが、キヨ子さんには息子さんが出て、学資やら何やらで金がかかる。いっそ、山を売ってしまおうと思ったが、売却するには「たけこ」の実子である私の実印がなければならぬ。

養女にも隠し通した母